

## 11. 柔道授業協力者導入による中学生の柔道授業に対する態度に及ぼす影響 －授業協力者積極導入S区の場合（第一報）－

大東文化大学	高橋 進
東京都杉並区立和田中学校	田中 裕之
東京都練馬区立貫井中学校	高橋 健司
東京都立秋留台高等学校	磯村 元信
講道館	尾形 敬史
講道館	鮫島 元成
講道館	小志田憲一
講道館	向井 幹博
群馬県立前橋高等特別支援学校	森 英也
筑波大学附属高等学校	鮫島 康太
鹿児島大学	與儀 幸朝
全日本柔道連盟武道等指導支援強化委員	浅野 哲男
全日本柔道連盟武道等指導支援強化委員	佐藤 幸夫
関東学園大学	竹澤 稔裕
横浜国立大学	木村 昌彦

## 11. The Influence on Attitude toward Judo Lessons of Junior High School Students by Introducing Cooperators in Judo Lessons － In Case of S-Ku Which is Aggressively Introducing Cooperators －

Susumu TAKAHASHI	(Daito Bunka University)
Hiroyuki TANAKA	(Wada Junior High School, Suginami Tokyo)
Kenji TAKAHASHI	(Nukui Junior High School, Nerima Tokyo)
Motonobu ISOMURA	(Akirunodai High School, Tokyo)
Takashi OGATA	(Kodokan)
Motonari SAMESHIMA	(Kodokan)
Ken-ichi SHOSHIDA	(Kodokan)
Mikihiro MUKAI	(Kodokan)
Hideya MORI	(Maebashi Special Needs High School, Gunma)
Kota SAMESHIMA	(Senior High School at Otsuka, University of Tsukuba)
Yukitomo YOGI	(Kagoshima University)

Tetsuo ASANO (All Japan Judo Federation)  
Yukio SATO (All Japan Judo Federation)  
Toshihiro TAKEZAWA (Kanto Gakuen University)  
Masahiko KIMURA (Yokohama National University)

### Abstract

The purpose of this study was investigate the influence on attitude toward Judo lessons of junior high school students by introducing cooperators in Judo lessons. Subjects were both 7th grade and 8th grade junior high school students. Just before starting Judo learning, 20 topics was measured by questionnaires which consists of 3 attitude scales toward students. Obtain data were analyzed t-test, factor analysis. But extracted factor was only 2 factors. Particularly the first factor was involved almost topics except 2 topics which indicated affectional towards to Judo lessons. Therefore it was divided 5 viewpoint scales based on Japanese government's course of physical education study at junior high school. And furthermore, the relationship between each scales analyzed by correlation analysis. The results were as follows:

- (1) It was suggested that male student's both the affectional attitude and effective recognition were superior to female students'. That evaluation was not so bad.
- (2) It was cleared that students the affectional attitude toward Judo lessons was able to be changed to desirable direction by taking advantage of cooperators in Judo lessons.
- (3) It was recognized that the motivation level for learning Japanese traditional culture was able to be enhanced more and more with taking advantage of cooperators in Judo lessons.
- (4) It was suggested that both 7 "attitude scale" points and "comprehension and discernment ability" scale points for educational goal which were based on Japanese government's course of physical education study at junior high school indicated were good assessment. This result also proved accomplishment of effective learning by full-time physical education teachers on each school. On the other hand, almost female student's 7 "attitude scale" points were superior to male students'.
- (5) It was found the task about one of "knowledge" scale points. It was recognized that we ought to develop the teaching materials for gaining both meaningful and interesting "knowledge" of Judo history and so on for students.
- (6) It was suggested that both full-time physical education teachers and Judo cooperator had to continue to endeavor to improve qualities for Judo's learning methodology through the results of analysis by correlation analysis.

### I. 緒言

平成24年に完全実施となった中学校における武道必修化に対して、メディアを中心とした世論が、諸手を挙げた賛成ではなかったことは周知の通りである。特に、「柔道」に対する風当たりは強く、内田の記した論文<sup>14)</sup>「柔道事故－武道必修化が何をもたらすのか－（学校安全の死角）」

では、『武道必修化の時代とは、「一部から全員へ」の時代である。その「全員」が、もっとも危険な運動へ向かっている。柔道はその「よさ」以上に、まずもってその「危険性」を強調しなければならない。現実を直視した上で、その「危険性」への対処を早急に検討する必要性がある』と結論していたほどである。また、武道必修化を4月に控えた平成24年2月6日(月)、その内田の研究を論拠として、NHKクローズアップ現代「“必修化”は大丈夫か 多発する柔道事故」<sup>7)</sup>が放送されたことも記憶に新しい。

以上のような事態を受けて文部科学省は、平成24年3月9日付で異例とも思われる「武道必修化に伴う柔道の安全管理の徹底について(依頼)」<sup>3)</sup>を、各都道府県・指定都市教育委員会教育長、各都道府県知事、附属学校を置く各国立大学長宛てに通達を出し、同年同月「柔道の授業の安全な実施に向けて」<sup>4)</sup>を各学校に送付している。全日本柔道連盟に対しても、「柔道の授業における相談窓口の整備や外部指導者の派遣体制の整備など」について協力を要請した。文部科学省では、正に滑り込みの対応を迫られることとなったが、平成24年4月に武道必修化がスタートし、幸いにも心配された懸念は現実化することなく4年が経過しようとしている。

さて、全日本柔道連盟では、文部科学省から上記の要請を受けて「武道等強化支援委員会」を発足。平成24年度から始まった「文部科学省武道等推進事業」を委託申請し受託が決定した。特に、授業協力者養成のためのカリキュラムの策定、授業協力者を活用するためのデータベースおよび管理システムの構築、並びに都道府県教育委員会および中学校への授業協力者の派遣体制の整備など、県及び指定都市教育委員会への周知を行うことを目的とし事業遂行を進めた。

平成25年度の同事業では、一部都道府県や政令指定都市において派遣業務が行われたが、「全国コーディネーター会議」で情報交換を行うなど、コーディネーターを積極的に活用することで、当該都道府県教育委員会だけでなく、市区町村郡の教育委員会及び中学校に対しこのシステムを周知するなど、協力者の積極的活用につなげる施策の検討と試作的実施も行った。併せて、授業協力者は必要だが、現場では確保、派遣に至らない場合などの対応を検討するに及んだ。

平成26年度についても同事業の委託を受けることとなったが、この年度になると、一部の都道府県や政令指定都市の教育委員会においても、「武道等推進事業」の委託を受け、当該柔道連盟と連携を図り、事業実施に及んでいる例も散見されるようになった。特に、当該の都道府県教育委員会では、平成25年度までに、本委託事業の申請趣旨により全日本柔道連盟が計画し、ネットワークを育んだコーディネーター制度を十分に活用し、中学校への授業協力者の派遣事業(本連盟構築の授業協力者名簿の活用)や中学校教員のための研修会(講師にコーディネーターを招聘)などを円滑に推進する一助となってきたことが、アンケート調査からも明らかとなった。

しかし、中学校での武道推進に向けて、当該柔道連盟との間に協力体制が構築できてないと公言する都道府県も見られるなど、授業協力者の活用に関しては温度差が大きく事業を進めるにあたっての課題ともなった。また、市区町村郡教育委員会と当該柔道連盟との連携・連携は残念ながら希薄なところもあり、両者の関係構築が急務になった。

ところで、平成26年度本事業のその他の遂行結果分析によれば、以下の点が、コーディネーター制度の推進にとって不可欠であることも明確となった。

1. 授業協力者活用の予算(武道推進事業を受諾された都道府県での「ヒアリング」から分析)。
2. 各都道府県教育委員会、市区町村郡教育委員会に本制度を今まで以上に周知し、中学校の武道担当教員(柔道が特技でない教員)への教育委員会を通しての「コーディネーターや授業協力者の出張講習や研修会」などの直接的な働きかけ。

そして、平成27年度は、「柔道の授業協力者導入の実態と評価」を明らかにすることを目的に、都道府県教育委員会に留まらず、市区町村郡教育委員会全件に対しアンケートを実施した。対象は1,743。有効回答率は51.8%であった。その結果、「柔道を選択している割合が62.7%」、「授業協力者を活用している割合が24.5%」、「特定の技を禁止している割合が14.6%」等々、より明確な柔道の実施実態が明らかになった。

更に、平成27年度については、平成26年度の事業を踏襲するだけでなく、都道府県柔道連盟・協会が行う「授業協力者養成講習会」とも連携し、学校現場の授業がよりよく推進できるよう、柔道の実施時間現状に合わせた、「授業協力者並びに柔道を特技としない保健体育科教員」の指導の一助となるためのガイドブック並びにDVD作成<sup>2)</sup>に着手、発刊に及んでいる。

本年度、平成28年度からは、委託申請先がスポーツ庁となり、平成28年度武道等指導充実・資質向上支援事業（テーマ3：支援体制の強化）の委託を受けることとなった。その事業内容の柱は以下のとおりである。

- ア 中学校の柔道授業実態に即した「授業協力者養成講習会」の支援事業。
- イ 教員と授業協力者が共に柔道指導力向上を目指した支援事業。
- ウ コーディネーター連絡会議の実施。
- エ 授業協力者のデータ管理システムの更なるフォローアップ。
- オ 授業協力者導入の市区町村郡教育委員会での活用状況を含めた調査結果・実態の、改善を目指した方策の検討。
- カ 授業協力者導入の中学校における部活動への協力状況を含めた、希望・実態調査の検討。

そこで、本研究では、上記オ)を実現するために、授業協力者導入による中学生の柔道授業に対する態度への影響を、アンケート調査の手法を用いて明らかにすることを目的とした。

特に、授業協力者導入によって、東京女子体育大学・文部科学省委託事業「武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）」調査研究協力者会議が、平成27年度に報告<sup>6)</sup>している「柔道授業への好意的態度の低さ」に対する好転的な態度変容の可能性、あるいは学習指導要領に示されたねらい並びに各観点別評価に準拠した意識や態度の現状把握並びに好意的な態度変容の可能性の検証を中心に研究を進めたいと考えた。従って、上記調査研究協力者会議が作成したアンケートをベースとし、更に必要と思われる項目を付加してアンケートを作成した。尚、本調査のタイトルにもなっている「態度」とは、社会心理学的な概念に基づく「態度三成分」を示している<sup>1)</sup>（感情的成分、認知的成分、行動的成分）。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象者

緒言で既述したとおり、授業協力者を柔道授業に導入するか否かの決定は、市区町村郡教育委員会レベルで鑑みるとかなり大きな差異が見られる。例えば、東京都N区の場合は、武道必修化の実施以前から、N区内の柔道を特技とする教員を軸として、「安全で効果的な柔道授業のための指導方法研修会」を継続的に実施し、保健体育教員全体の資質・向上に努めているため、積極的な授業協力者の活用は行っていない。一方都内S区の場合、柔道を特技とした現職の保健体育専任教員が居ないという特異的な状況が発生し、S区内全ての中学校・23校で授業

協力者を配置し、正に積極的な授業協力者活用に努めている。

以上のような特殊な教員人事配置の良し悪しについては、他の論稿に委ねることとし、本稿では、S区のような状況を調査・分析対象とし、授業協力者導入の効果を、検証変数を生徒の柔道授業に対する態度の変容（差異）として検証することをねらいとしたい。

そこで、東京都S区全ての中学校・23校、第1学年（授業実施前・単元実施後）、第2学年（授業実施前・単元実施後）の生徒を対象にアンケート調査を依頼した。

尚、回答を戴いた中学校については、柔道の実施時期の関係で、第1学年14中学校、第2学年13中学校となった。有効データ数については、第1学年、男子332名、女子234名、計566名。第2学年、男子303名、女子226名、計529名。総計1095名であった。また、本調査研究では、分析結果の第一報として、それぞれの学年の授業実施前のデータを取り上げて分析することとした（一昨年、昨年、本年ともに同一授業協力者が配置されている）。

## 2. 調査時期

各中学校ともに、2016年9月～11月末日の間。

## 3. 調査内容

調査の内容については、以下の項目、尺度から構成した。

### (1) 一般項目（対象者の属性）

所属中学校、性別、クラス、出席番号。

### (2) 柔道授業に対する態度尺度

東京女子体育大学「武道等指導推進事業（武道等の指導成果の検証）」調査研究協力者会議が、平成27年に調査<sup>6)</sup>を行った際に使用したアンケート16項目を基に、その他必要と思われる項目を、高橋<sup>8) 9) 10) 11) 12) 13)</sup>の柔道に対する態度に関する過去の研究から採用し20項目とした。

尚、項目の内容は、保健体育の授業、柔道授業に対する好意的態度を問う項目（感情的成分）、保健体育の授業、柔道授業の心身に及ぼす効果を問う項目（認知的成分）、あるいは学習指導要領に示されたねらい・観点別評価に準拠した意識を問う項目（教育目標に準拠した認知的成分・あるいは行動的成分を示す項目）で構成し、非常に感じる「4」から、全く感じない「1」を選択させる4件法で回答を求めた。

また、態度尺度を構成する20の項目の信頼性については、本調査で得られた1095件のデータを用い、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した結果、0.939とかなり高い信頼性を得ることができた。従って、態度尺度20全ての項目を有効項目と判断し研究を進めることとした。

質問の詳細は次のとおりである（感⇒感情的成分、認⇒認知的成分、行⇒行動的成分）。

- ① 保健体育の授業は好きである（感・好意的態度）。
- ② 保健体育の授業は楽しい（感・好意的態度）。
- ③ 保健体育の授業は心を育てると思う（認・効果的認知）。
- ④ 保健体育の授業は体力を高めると思う（認・効果的認知）。
- ⑤ 柔道の授業は好きである（感・好意的態度）。
- ⑥ 柔道の授業は楽しい（感・好意的態度）。

- ⑦ 柔道の授業は心を育てると思う（認・効果的認知）。
- ⑧ 柔道の授業は体力を高めると思う（認・効果的認知）。
- ⑨ 柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う（認・効果的認知）。
- ⑩ 柔道の授業で、分からないことや課題を出された時に積極的に取り組めると思う（認・積極的態）。
- ⑪ 柔道の授業では、練習や試合などの場面でルールや礼法、マナーを守ることが大切だと思う（認・公正的な態）。
- ⑫ 柔道の授業では、仲間と協力する場面で、教え合ったり助け合ったりしたいと思う（行・協力的な態）。
- ⑬ 柔道の授業では、準備や片付けなどの分担した役割を果たしたい（行・責任遂行的態）。
- ⑭ 柔道の授業では、自分の仲間の安全に気を配って取り組むことが大切だと思う（認・安全遵守的態）。
- ⑮ 柔道の授業で、礼や伝統的な所作ができるようにしたい（行・伝統的形式を学ぼうとする態）。
- ⑯ 柔道の授業をとおして、相手を尊重する態度を身に付けたい（行・相手への尊厳的態）。
- ⑰ 柔道の授業では、仲間と学習する場面で、仲間の良い動きや技を指摘することを心掛けたい（行・思考・判断）。
- ⑱ 柔道の授業では、課題を解決するために練習方法を工夫したい（行・思考・判断）。
- ⑲ 柔道の授業において、柔道の成り立ちや歴史に興味があり勉強したい（行・知識）。
- ⑳ 柔道の授業で、学んだ運動のコツやポイントを理解したい（行・知識）。

#### 4. 分析方法及び手順

- (1) 「柔道授業に対する態度尺度」における各項目は、4件法で回答を求めている。それぞれ4点から1点の得点を付与し、目的に応じて、平均点並びに標準偏差を算出した。
- (2) 「柔道授業に対する態度尺度」に関する20項目については、「第1学年男女」並びに「第2学年男女」のそれぞれの平均得点を算出した。
- (3) 「第1学年」のデータを「柔道授業を全く受けていない生徒の柔道授業に対する態度（以下、柔道授業未経験群）」、「第2学年」のデータを「第1学年において柔道授業単元を終了し、柔道授業を経験した生徒の柔道授業に対する態度（以下、柔道授業経験群）」と規定し、それぞれ20項目毎の平均得点の差異を対応のないt-検定によって検討することで、授業協力者の授業導入の影響を検証していくこととした。また、両群の男女間差（学年毎）についても、同様な手順で検討をすることにした。
- (4) 「柔道授業のみに対する態度尺度」16項目の評定値の項目相互の関連性を確認する観点から、主因子法による因子分析を以下のとおり施した。
  - (i) 固有値1.0以上である因子を抽出し、得られた因子行列に対して直行回転（Varimax回転）を施した。
  - (ii) 因子の解釈については、因子負荷量0.4以上を原則として採用した。

尚、本研究によるすべての計算処理は、SPSS 21.0J for Windowsによって行われた。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 調査対象者の性別・学年（属性）

調査対象者の属性については、表1～表2に示した。

調査対象者の性別（表1参照）は、男子生徒635名、女子生徒460名（アンケート回答中学校・14校）となった。また、対象者の所属学年（表2参照）は、第1学年所属が566名（男子332名、女子234名）、第2学年所属が529名（男子303名、女子226名）であり、総計1095名であった。

両学年ともに500件を超えるデータが得られたが、第1学年のデータ、第2学年のデータともに、S区のほぼ同じ中学校から得られたデータであり、それぞれを「未経験群」「経験群」と規定し、授業協力者の授業導入の影響を検証していくことの妥当性は確保されたと判断する。

表1. 対象者の性別  
Table1. Sex of students

項目	frequency	%	cum%
男子	635	58.0	58.0
女子	460	42.0	100.0
total	1095	100.0	

表2. 対象者の学年  
Table2. Grade of students

項目	frequency	%	cum%
1年生	566	51.7	51.7
2年生	529	48.3	100.0
total	1095	100.0	

#### 2. 授業協力者の授業導入の影響

##### (1) 「柔道授業未経験群」並びに「柔道授業経験群」の保健体育授業感の差異から

表3には、男子1年生、2年生、表4には女子1年生、2年生、表5には、男女1年生、表6には男女2年生の態度尺度20項目の平均得点並びに標準偏差、それぞれ両群間の有意差検定の結果（t-test）を示してある。

その結果、男子1年生の「保健体育授業に対するの好意的態度」を示す項目については、「保健体育の授業は好きである・3.422±.702（点）」、「保健体育の授業は楽しい・3.464±.688（点）」と非常に好意的であることが示唆された。また、「保健体育に対するの効果的認知」を示す2項目についても、「保健体育の授業は心を育てると思う・3.208±.771（点）」、「保健体育の授業は体力を高めると思う・3.657±.579（点）」と、その得点は高く、保健体育授業に対する心身への効果的影響の認知度についてもかなり高いことが窺える。

文部科学省が実施している「平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果報告書」<sup>5)</sup>の中で、「中学校男子で、運動やスポーツが好きと回答した割合（好き・やや好きの合計割合）」が示されているが、90.6%と非常に好意的であることが際立つ。この結果は、中学生期男子生徒のスポーツや運動に対する期待感が非常に高いことを示唆しているとともに、本調査結果における、男子1年生の保健体育授業に対する良好的な態度の事由を示しているとも考えられる。また、男子2年生に関しても、「保健体育の授業は好きである・3.373±.734（点）」、「保健体育の授業は楽しい・3.393±.768（点）」と非常に好意的な感情的傾向を示しており、1年生との間に統計的な有意差は認められない。

しかしながら、「保健体育に対するの効果的認知」の2項目は、「保健体育の授業は心を育てると思う・3.033±.856（点）」、「保健体育の授業は体力を高めると思う・3.518±.727（点）」となっており、何れも1年生との得点比較から鑑みると、決して低値ではないものの統計的

に有意に低いことが示唆された。

2年時の2学期ともなれば、中学校生活のほぼ折り返し地点での保健体育授業の振り返りということになる。上述したように、保健体育授業が心身に与える効果感としては、この時期になっても決して低くはないが、特に男子生徒では、運動部活動などの経験も進み、自身の精神力の涵養や体力の増進については、中学校の活動全体から得られた賜物であるという認知が強くなることは必至であり、保健体育授業への効果感の低下を齎したと考えられる。

さて、1年生女子における(表4・5参照)「保健体育授業に対する好意的態度」については、「保健体育の授業は好きである・ $3.226 \pm .862$ (点)」、「保健体育の授業は楽しい・ $3.274 \pm .804$ (点)」であり、2項目ともに男子1年生との比較においては(表5参照)統計的に有意に低いことが認められるものの、やや高いことが示唆された。

また、「保健体育に対する効果的認知」を示す2項目については、「保健体育の授業は心を育てると思う・ $3.120 \pm .737$ (点)」、「保健体育の授業は体力を高めると思う・ $3.635 \pm .580$ (点)」とやはり良好であり、男子1年生との間に統計的有意差も認められない。

上述した文部科学省の調査結果では、「中学校女子で、運動やスポーツが好きと回答した割合(好き・やや好きの合計割合)」は、79.4%と男子に比較してかなり低いことが示されており、体育授業に関する好意感については、この時期の男女の特性差が反映された結果と判断できる。しかしながら、体育授業に対する心身への効果感が高く、本調査1年生女子の健全な意識が垣間見られる。

女子2年生の、「保健体育授業に対する好意的態度」については、「保健体育の授業は好きである・ $3.301 \pm .788$ (点)」、「保健体育の授業は楽しい・ $3.319 \pm .751$ (点)」であり、共に統計的に有意ではないものの1年生女子と比較すると2年生女子のほうが高く(表4参照)、2年生男子の2項目の得点との間に統計的な有意差も認められない(表4・6参照)。

更に、「保健体育の授業は心を育てると思う・ $3.093 \pm .794$ (点)」、「保健体育の授業は体力を高めると思う・ $3.611 \pm .617$ (点)」と、「保健体育に対する効果的認知」を示す2項目それぞれの得点もかなり高く、1年生女子、並びに2年生男子との間に統計的な有意差は認められない(表4・6参照)。

以上から、中学生の「保健体育授業に対する好意的な態度や効果感」は、「好意的な態度」に男子が優位であるという傾向が認められるものの、かなり良好であることが示唆された。

(3) 「柔道授業未経験群」並びに「柔道授業経験群」の柔道授業感の差異から

「柔道の授業は好きである」「柔道の授業は楽しい」の2項目については、「柔道授業に対する好意的態度」を示し、「柔道の授業は心を育てると思う」「柔道の授業は体力を高めると思う」「柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う」については、「柔道授業に対する効果的認知」を示している。

その中で、1年生に関しては、「柔道授業に対する好意的態度」得点が中庸であることが示唆された(表3・4参照、「柔道の授業は好きである」・男子 $2.606 \pm .959$ (点)、女子 $2.522 \pm .975$ (点)「柔道の授業は楽しい」・男子 $2.616 \pm .947$ (点)、女子 $2.549 \pm .999$ (点)」。それに対して、「柔道授業に対する効果的認知」を示す3項目は、やはり1年生の男女を問わず、「柔道の授業は心を育てると思う」・男子 $2.907 \pm .933$ (点)、女子 $2.864 \pm .911$ (点)「柔道の授業は体力を高めると思う」・男子 $3.046 \pm .910$ (点)、女子 $3.213 \pm .845$ (点)「柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う」・男子 $3.166 \pm .911$ (点)、女子 $3.259 \pm .834$ (点)」と、やや



高い得点を示している。

尚、男女1年生両群間の項目で統計的有意差が認められた項目は、「柔道の授業は体力を高めると思う」のみであり、女子1年生の体力に対する効果感が男子1年生に比較して高いという結果が示唆された(表5参照)。

ところで、高橋らの中学生・高校生を対象にした「柔道に対する態度」に関する諸研究<sup>8) 9) 10) 11) 12) 13)</sup>において、認知的側面の良好さ、並びに感情的側面の低さが指摘され、認知的側面と感情的側面の不一致性が問題とされている。本調査では、感情的側面を示す好意的2項目は、男女ともに中庸であり、決して低いということではないものの、保健体育授業のそれらと比較すると体育領域にありながら柔道に対するイメージの低さが際立ち、過去の高橋の指摘<sup>8) 9) 10) 11) 12) 13)</sup>を支持することとなった。

一方、2年生男女の「柔道授業に対する好意的態度」を1年生の2項目と比較すると共に高い得点となっており、非常に喜ばしい結果が示唆されている(表3・4参照)。特に2年生男子においては、両項目ともに男女間でも学年間でも統計的有意差が認められた(表3・6参照「柔道の授業は好きである・2年男子2.805±.884(点)、1年男子2.606±.959(点)、2年女子2.600±.871(点)」「柔道の授業は楽しい・2年男子2.914±.896±(点)、1年男子2.616±.947(点)、2年女子2.689±.867(点)」)。

一旦形成された態度が変容することは大変難しいとも言われているが、本調査における男子に見られる統計的有意差は意義深い。なぜならば、高橋<sup>8) 9) 10) 11) 12) 13)</sup>が言うように、感情的側面における柔道や柔道授業に対する態度は、一般的に高いとは言いがたいからである。しかしながら、本調査の2年生の態度得点は、中庸というよりもやや高い評価を得ている。研究方法で触れたように、S区では全ての中学校に柔道授業協力者が配置されており、その好影響と考えることは飛躍的推論であるとは言いがたい。勿論、同一授業者による態度変容を確認する必要性は否めず、本調査の第二報ではそれらを明確にする所存である。

2年生の「柔道授業に対する効果的認知」を示す3項目は、「柔道の授業は心を育てると思う・男子2.987±.887(点)、女子2.885±.877(点)」「柔道の授業は体力を高めると思う・男子2.916±.884(点)、女子2.947±.820(点)」「柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う・男子3.143±.863(点)、女子3.327±.754(点)」と、やはりやや高い得点を示している(表3・4・6参照)。

また、2年生男女間で統計的有意差が見られる項目は、「柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う」の項目であり、女子の評価が優位であった(表6参照)。

更に、学年間で統計的有意差が認められた項目は、女子1年生と女子2年生「柔道の授業は体力を高めると思う」の項目のみであり、女子1年生の体力に対する効果感が女子2年生に比較して高いという結果が示唆された(表4参照)。

また統計的有意差は出ていないが、「柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う」の項目について、2年生女子の得点が1年生に比較して優位であった。このことは、「日本の伝統的文化」に対する興味涵養を裏付けるものであり、「武道」単元の大きなねらいの一端が成就されていると言っても過言ではあるまい。特に、「武道」を特技としない教員にとっては、単元時間が限られる中、その教授法に苦慮していることは周知のとおりであり、授業協力者導入による教育効果と推測される。

以上、柔道授業者の好意的態度や効果的認知について学年間の評価差異から以下の事項が

表3. 保健体育授業並びに柔道授業に対する態度における各項目の平均得点、標準偏差及びt検定結果(男子)  
Table3. The difference of cognitive score between male students of 7th grade and 8th grade (results of t-test)

項目内容	学年	N	平均得点	標準偏差	有意差
保健体育の授業は好きである	1年生	332	3.422	.702	有意差なし
	2年生	303	3.373	.734	
保健体育の授業は楽しい	1年生	332	3.464	.688	有意差なし
	2年生	303	3.393	.768	
保健体育の授業は心を育てると思う	1年生	332	3.208	.771	P < .01
	2年生	301	3.033	.856	
保健体育の授業は体力を高めると思う	1年生	332	3.657	.579	P < .01
	2年生	303	3.518	.727	
柔道の授業は好きである	1年生	307	2.606	.959	P < .01
	2年生	302	2.805	.884	
柔道の授業は楽しい	1年生	292	2.616	.947	P < .001
	2年生	302	2.914	.896	
柔道の授業は心を育てると思う	1年生	322	2.907	.933	有意差なし
	2年生	301	2.987	.887	
柔道の授業は体力を高めると思う	1年生	325	3.046	.910	有意差なし
	2年生	299	2.916	.884	
柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う	1年生	325	3.166	.911	有意差なし
	2年生	300	3.143	.863	
柔道の授業で、積極的に取り組めると思う	1年生	327	2.890	.822	有意差なし
	2年生	298	3.000	.765	
ルールや礼法、マナーを守ることが大切	1年生	326	3.583	.751	有意差なし
	2年生	300	3.577	.663	
教え合い、助け合いが大切	1年生	331	3.305	.790	有意差なし
	2年生	302	3.281	.749	
準備や片付けなどの分担した役割をしたい	1年生	331	3.381	.771	有意差なし
	2年生	302	3.364	.715	
安全に気を配って取り組むことが大切	1年生	331	3.583	.756	有意差なし
	2年生	300	3.547	.695	
礼や伝統的な所作ができるようにしたい	1年生	331	3.369	.855	有意差なし
	2年生	302	3.328	.757	
相手を尊重する態度の涵養を希望	1年生	332	3.310	.864	有意差なし
	2年生	301	3.349	.784	
仲間の良い動きや技を指摘したい	1年生	330	3.200	.808	有意差なし
	2年生	302	3.152	.792	
課題を解決するために練習方法を工夫したい	1年生	331	3.127	.821	有意差なし
	2年生	300	3.157	.766	
歴史や成り立ちを勉強したい	1年生	331	2.634	.958	有意差なし
	2年生	301	2.651	.910	
学んだコツやポイントを理解したい	1年生	330	3.276	.836	有意差なし
	2年生	301	3.256	.786	

表4. 保健体育授業並びに柔道授業に対する態度における各項目の平均得点、標準偏差及びt検定結果(女子)  
 Table4. The difference of cognitive score between female students of 7th grade and 8th grade ( results of t-test)

項目内容	学年	N	平均得点	標準偏差	有意差
保健体育の授業は好きである	1年生	234	3.226	.862	有意差なし
	2年生	226	3.301	.788	
保健体育の授業は楽しい	1年生	234	3.274	.804	有意差なし
	2年生	226	3.319	.751	
保健体育の授業は心を育てると思う	1年生	234	3.120	.737	有意差なし
	2年生	225	3.093	.794	
保健体育の授業は体力を高めると思う	1年生	233	3.635	.580	有意差なし
	2年生	226	3.611	.617	
柔道の授業は好きである	1年生	207	2.522	.975	有意差なし
	2年生	225	2.600	.871	
柔道の授業は楽しい	1年生	193	2.549	.999	有意差なし
	2年生	225	2.689	.867	
柔道の授業は心を育てると思う	1年生	220	2.864	.911	有意差なし
	2年生	226	2.885	.877	
柔道の授業は体力を高めると思う	1年生	221	3.213	.845	P < .01
	2年生	226	2.947	.820	
柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う	1年生	224	3.259	.834	有意差なし
	2年生	226	3.327	.754	
柔道の授業で、積極的に取り組めると思う	1年生	223	2.919	.850	有意差なし
	2年生	226	2.973	.794	
ルールや礼法、マナーを守ることが大切	1年生	225	3.631	.696	有意差なし
	2年生	225	3.733	.491	
教え合い、助け合いが大切	1年生	229	3.432	.750	有意差なし
	2年生	226	3.434	.691	
準備や片付けなどの分担した役割をしたい	1年生	229	3.533	.704	有意差なし
	2年生	226	3.628	.537	
安全に気を配って取り組むことが大切	1年生	229	3.703	.613	P < .05
	2年生	226	3.810	.393	
礼や伝統的な所作ができるようにしたい	1年生	229	3.393	.774	有意差なし
	2年生	226	3.425	.722	
相手を尊重する態度の涵養を希望	1年生	229	3.410	.765	有意差なし
	2年生	226	3.513	.634	
仲間の良い動きや技を指摘したい	1年生	229	3.218	.803	有意差なし
	2年生	225	3.329	.674	
課題を解決するために練習方法を工夫したい	1年生	229	3.188	.803	有意差なし
	2年生	226	3.239	.715	
歴史や成り立ちを勉強したい	1年生	229	2.699	.942	有意差なし
	2年生	226	2.571	.826	
学んだコツやポイントを理解したい	1年生	229	3.284	.818	有意差なし
	2年生	226	3.279	.787	

表5. 保健体育授業並びに柔道授業に対する態度における各項目の平均得点、標準偏差及びt検定結果(1年生男女差)  
Table5. The difference of cognitive score between male students and female students in 7th grade (results of t-test)

項目内容	学年	N	平均得点	標準偏差	有意差
保健体育の授業は好きである	男子	332	3.422	.702	P < .01
	女子	234	3.226	.862	
保健体育の授業は楽しい	男子	332	3.464	.688	P < .01
	女子	234	3.274	.804	
保健体育の授業は心を育てると思う	男子	332	3.208	.771	有意差なし
	女子	234	3.120	.737	
保健体育の授業は体力を高めると思う	男子	332	3.657	.579	有意差なし
	女子	233	3.635	.580	
柔道の授業は好きである	男子	307	2.606	.959	有意差なし
	女子	207	2.522	.975	
柔道の授業は楽しい	男子	292	2.616	.947	有意差なし
	女子	193	2.549	.999	
柔道の授業は心を育てると思う	男子	322	2.907	.933	有意差なし
	女子	220	2.864	.911	
柔道の授業は体力を高めると思う	男子	325	3.046	.910	P < .05
	女子	221	3.213	.845	
柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う	男子	325	3.166	.911	有意差なし
	女子	224	3.259	.834	
柔道の授業で、積極的に取り組めると思う	男子	327	2.890	.822	有意差なし
	女子	223	2.919	.850	
ルールや礼法、マナーを守ることが大切	男子	326	3.583	.751	有意差なし
	女子	225	3.631	.696	
教え合い、助け合いが大切	男子	331	3.305	.790	P < .05
	女子	229	3.432	.750	
準備や片付けなどの分担した役割をしたい	男子	331	3.381	.771	P < .05
	女子	229	3.533	.704	
安全に気を配って取り組むことが大切	男子	331	3.583	.756	P < .05
	女子	229	3.703	.613	
礼や伝統的な所作ができるようにしたい	男子	331	3.369	.855	有意差なし
	女子	229	3.393	.774	
相手を尊重する態度の涵養を希望	男子	332	3.310	.864	有意差なし
	女子	229	3.410	.765	
仲間の良い動きや技を指摘したい	男子	330	3.200	.808	有意差なし
	女子	229	3.218	.803	
課題を解決するために練習方法を工夫したい	男子	331	3.127	.821	有意差なし
	女子	229	3.188	.803	
歴史や成り立ちを勉強したい	男子	331	2.634	.958	有意差なし
	女子	229	2.699	.942	
学んだコツやポイントを理解したい	男子	330	3.276	.836	有意差なし
	女子	229	3.284	.818	

表6. 保健体育授業並びに柔道授業に対する態度における各項目の平均得点、標準偏差及びt検定結果(2年生男女差)  
 Table6. The difference of cognitive score between male students and female students in 8th grade (results of t-test)

項目内容	学年	N	平均得点	標準偏差	有意差
保健体育の授業は好きである	男子	303	3.373	.734	有意差なし
	女子	226	3.301	.788	
保健体育の授業は楽しい	男子	303	3.393	.768	有意差なし
	女子	226	3.319	.751	
保健体育の授業は心を育てると思う	男子	301	3.033	.856	有意差なし
	女子	225	3.093	.794	
保健体育の授業は体力を高めると思う	男子	303	3.518	.727	有意差なし
	女子	226	3.611	.617	
柔道の授業は好きである	男子	302	2.805	.884	P < .01
	女子	225	2.600	.871	
柔道の授業は楽しい	男子	302	2.914	.896	P < .01
	女子	225	2.689	.867	
柔道の授業は心を育てると思う	男子	301	2.987	.887	有意差なし
	女子	226	2.885	.877	
柔道の授業は体力を高めると思う	男子	299	2.916	.884	有意差なし
	女子	226	2.947	.820	
柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う	男子	300	3.143	.863	P < .01
	女子	226	3.327	.754	
柔道の授業で、積極的に取り組めると思う	男子	298	3.000	.765	有意差なし
	女子	226	2.973	.794	
ルールや礼法、マナーを守ることが大切	男子	300	3.577	.663	P < .01
	女子	225	3.733	.491	
教え合い、助け合いが大切	男子	302	3.281	.749	P < .05
	女子	226	3.434	.691	
準備や片付けなどの分担した役割をしたい	男子	302	3.364	.715	P < .001
	女子	226	3.628	.537	
安全に気を配って取り組むことが大切	男子	300	3.547	.695	P < .001
	女子	226	3.810	.393	
礼や伝統的な所作ができるようにしたい	男子	302	3.328	.757	有意差なし
	女子	226	3.425	.722	
相手を尊重する態度の涵養を希望	男子	301	3.349	.784	P < .01
	女子	226	3.513	.634	
仲間の良い動きや技を指摘したい	男子	302	3.152	.792	P < .01
	女子	225	3.329	.674	
課題を解決するために練習方法を工夫したい	男子	300	3.157	.766	有意差なし
	女子	226	3.239	.715	
歴史や成り立ちを勉強したい	男子	301	2.651	.910	有意差なし
	女子	226	2.571	.826	
学んだコツやポイントを理解したい	男子	301	3.256	.786	有意差なし
	女子	226	3.279	.787	

浮き彫りにされた。

- (i) 本調査対象者の柔道授業に対する「好意的な態度」は中庸であり、「効果的認知」は、やや高いことが示唆された。
- (ii) 「柔道授業に対する好意的な態度」は、授業協力者の積極的な導入によって、好転的な変容を来す可能性が示唆された。
- (iii) 「武道」単元の中で、授業協力者の積極的な導入によって「日本の伝統的文化」に対する興味涵養が進む可能性が示唆された。
- (4) 「柔道授業未経験群」並びに「柔道授業経験群」の観点別評価に準拠した意識（態度）の差異から

観点別評価に準拠した「態度」に分類される項目は、以下の7項目である。

- ①「柔道の授業で、積極的に取り組めると思う」・・・愛好的態度
- ②「ルールや礼法、マナーを守ることが大切」・・・公正的態度
- ③「教え合い、助け合いが大切」・・・協力的態度
- ④「準備や片付けなどの分担した役割をしたい」・・・責任遂行的態度
- ⑤「安全に気を配って取り組むことが大切」・・・安全遵守的態度
- ⑥「礼や伝統的な所作ができるようにしたい」・・・伝統的形式を学ぼうとする態度
- ⑦「相手を尊重する態度の涵養を希望」・・・相手への尊厳的態度

表3に見られるように、「柔道授業未経験群」の1年生男子の得点は、「柔道の授業で、積極的に取り組めると思う・2.890±.822（点）」が3点を下回るのみで、残りの6項目全てが、3.3（点）～3.5（点）の範囲にあり、かなり高い評価を示している。

また、2年生男子（表3参照）については、7項目全てで、3（点）を上回っている（全ての項目で男子1，2年生間に統計的有意差は認められない）。

一方、1年生女子（表4参照）の得点についても、1年生男子同様に「柔道の授業で、積極的に取り組めると思う・2.919±.850（点）」が3点を下回るのみであった。他の6項目についても、全て3点を超えているが、その中で特に、「ルールや礼法、マナーを守ることが大切・3.631±.696（点）」や「安全に気を配って取り組むことが大切・3.703±.613（点）」等の高得点が目を見張った。

2年生女子（表4参照）に至っては、「安全に気を配って取り組むことが大切・3.810±.393（点）」の項目が、1年生に比較して更に高く（統計的有意差あり）、他の6項目についても、統計的に有意差は認められないものの2年生女子の得点が高いことが示唆された。

一方、男女間差については（表5・6参照）、1年生で「教え合い、助け合いが大切・男子3.305±.790（点）、女子3.432±.750（点）」、「準備や片付けなどの分担した役割をしたい・男子3.381±.771（点）、女子3.533±.704（点）」、「安全に気を配って取り組むことが大切・男子3.583±.756（点）、女子3.703±.613（点）」の3項目に統計的有意差が認められ、女子が全ての項目で優位であった。また、2年生で統計的に有意差が認められた項目は、「ルールや礼法、マナーを守ることが大切・男子3.577±.663（点）、女子3.733±.491（点）」、「教え合い、助け合いが大切・男子3.281±.749（点）、女子3.434±.691（点）」、「準備や片付けなどの分担した役割をしたい・男子3.364±.715（点）、女子3.628±.537（点）」、「安全に気を配って取り組むことが大切・男子3.547±.695（点）、女子3.810±.393（点）」、「相手を尊重する態度の涵養を希望・男子3.349±.784（点）、女子3.513±.634（点）」の5項目。1年生

と同様に、女子が全ての項目で優位であった。

「柔道の授業で、積極的に取り組めると思う」、「礼や伝統的な所作ができるようにしたい」、「相手を尊重する態度の涵養を希望」の3態度項目については、柔道授業特有の内容と言えるが、他の4項目については、柔道授業のみならず保健体育領域全てに通ずる態度項目であり、柔道授業協力者の導入による影響というよりも、普段の保健体育授業の好影響を窺い知ることができる。特に、上述したようにこれらの4項目の得点は各学年、男女ともに高く、保健体育の授業をとおしてねらうべき生徒の態度・姿勢が涵養されていることを物語っている。また、これら4項目の内容は、行動的成分に分類される内容標記が2項目あり（「柔道の授業では、仲間と協力する場面で、教え合ったり助け合ったりしたいと思う（行・協力的な態度）」、「柔道の授業では、準備や片付けなどの分担した役割を果たしたい（行・責任遂行的態度）」）、生徒自身の授業に向かう動機水準の高さをも示している。併せて、女子の得点が男子に比較して高いことが示唆された。

以上から、次にあげる各点が明らかとなった。

- (i) 観点別評価に準拠した「態度」に分類される7項目（「愛好的態度」、「公正的態度」、「協力的態度」、「責任遂行的態度」、「安全遵守の態度」、「伝統的形式を学ぼうとする態度」、「相手への尊厳的態度」）全てについて、1年生男女、2年生男女ともに良好であることが示唆された。
- (ii) その得点傾向を鑑みると、女子のほうが男子よりも優位に高いことも伺えた。
- (iii) これらの結果は、柔道授業協力者の積極的導入の好影響を示唆するものではなく、調査対象者の高い健全性や現在までの保健体育授業において涵養すべき「態度」に対する達成度の高さを担保するものである。
- (5) 「柔道授業未経験群」並びに「柔道授業経験群」の観点別評価に準拠した意識（思考・判断）の差異から
 

「仲間の良い動きや技を指摘したい」、「課題を解決するために練習方法を工夫したい」の2項目が、「思考・判断」に関する項目である。両項目ともに、「～したい」と結んでいるが、態度構造の中で行動的成分を表し、柔道授業で自主的に思考を働かせ、状況を判断して積極的に学ぶ意欲を問う質問項目とも言える。

その結果、1年生、2年生の男子、女子（表3、4参照）において、2項目ともに3.1～3.3点台の範囲であり、やや高い得点が認められた（男女とも学年間に統計的有意差はない）。また、男女間差については、2年生の「仲間の良い動きや技を指摘したい・男子3.152±.792（点）、女子3.329±.674（点）」の項目で統計的有意差が認められ、女子の優位性が示唆された（表6参照）。

以上から、本対象者は、男女ともに、保健体育授業をとおして、「思考力・判断力」の態度涵養が進んでいることが示唆された。また、これらの項目の得点結果から、柔道授業に対する本授業対象者の高い動機水準が示唆された。
- (6) 「柔道授業未経験群」並びに「柔道授業経験群」の観点別評価に準拠した意識（知識）の差異から

「歴史や成り立ちを勉強したい」、「学んだコツやポイントを理解したい」の2項目が、「知識」に関する項目であり、態度構造の中で行動的成分を示している。柔道授業をとおして、「柔道の歴史や成り立ちといった知識を積極的に吸収」したり、「知識や技能を深く理解し

応用」していききたいという態度を問う項目でもある。

その結果、1・2年生ともに学年間、男女間の統計的な有意差が認められなかった（表3～6参照）。但し、「学んだコツやポイントを理解したい」の項目の得点は、1年生、2年生の男女ともに3.2（点）台で、やや高い値を示したものの、「歴史や成り立ちを勉強したい」の項目では、「男子1年生・2.634±.958（点）、男子2年生・2.651±.910（点）、女子1年生・2.699±.942（点）、女子2年生・2.571±.826（点）」と、中庸な値に留まった。1・2年生男女ともに中庸な得点から考えると、ただ単に柔道の単元時間数が少ないという問題だけではなく、保健体育全体の各領域、各種目における歴史や成り立ちにおける「知識」享受を考える必要性が示唆された。特に柔道においては、伝統的な文化への理解を生徒に対して促すことが、ねらいの一端であるという観点からも、楽しく・効果的な「知識」享受を達成し得る教材の工夫開発が課題とも言える。

以上から、以下の2点が明らかになった。

- (i) 「歴史や成り立ちを勉強したい」の項目では、1年生、2年生男女ともに中庸な値に留まった。
- (ii) 柔道授業における、楽しく・効果的な「知識」享受を達成し得る教材の工夫開発が課題であることが示唆された。

### 3. 調査対象者の柔道授業に対する態度構造

「柔道授業のみに対する態度尺度」16項目の評定値の項目相互の関連性を確認する観点から、主因子法による因子分析を施した結果、抽出された因子は2因子であった（表8参照）。尚、回転後の貢献度は、2因子で59.2%となった（表7参照）。

表7. 相関行列の固有値  
Table7. Eigenvalue of rotated factor matrix

因子	回転後の負荷量平方和		
	固有値	貢献度	累積貢献度
F1	6.196	38.727	38.727
F2	3.274	20.465	59.192

第1因子に因子負荷量0.4以上を示す因子は、「柔道の授業は好きである」、「柔道の授業は楽しい」以外の全てであり、「柔道授業に対する観点別態度因子」と命名することができる。

また、第2因子は、「柔道の授業は好きである」、「柔道の授業は楽しい」に加え、「柔道の授業は心を育てると思う」、「柔道の授業は体力を高めると思う」「柔道の授業で、分からないことや課題を出された時に積極的に取り組めると思う」の5項目で因子負荷量が0.4以上となった。そこで、この因子を「柔道授業に対する愛好的・効果的態度因子」と解釈・命名した。

以上の因子解釈の観点から鑑みれば、特に第1因子が示唆しているように、項目間の関連性がかなり高いことが理解できる。また、2因子間の因子平均得点間（因子に含まれる項目の総評定点÷項目数）で、その関連性を検討するにはあまりにも単純・雑駁である。

そこで、因子分析によって得られた2因子を「結果と考察2」で挙げた態度分類に準じて5観点別尺度とし、観点別尺度平均得点（尺度に含まれる項目の総評定点÷項目数）を算出した上で、5尺度間の関連性を次項で検討することとした。



表8. 柔道授業に対する因子分析結果  
Table8. Roted factor loading

項目内容	因子	
	F1	F2
柔道の授業は好きである	.178	.890
柔道の授業は楽しい	.197	.912
柔道の授業は心を育てると思う	.440	.543
柔道の授業は体力を高めると思う	.464	.455
柔道の授業で日本の伝統文化を学べると思う	.546	.306
柔道の授業で、積極的に取り組めると思う	.540	.481
ルールや礼法、マナーを守ることが大切	.725	.202
教え合い、助け合いが大切	.738	.293
準備や片付けなどの分担した役割をしたい	.766	.186
安全に気を配って取り組むことが大切	.763	.161
礼や伝統的な所作ができるようにしたい	.732	.286
相手を尊重する態度の涵養を希望	.784	.242
仲間の良い動きや技を指摘したい	.746	.306
課題を解決するために練習方法を工夫したい	.723	.335
歴史や成り立ちを勉強したい	.445	.361
学んだコツやポイントを理解したい	.679	.398

#### 4. 尺度間の相関関係

因子分析の結果から、各項目間にかなり高い関連性があることが示唆された。更には、因子分析で得られた2因子と質問紙作成上の態度分類を根拠として16項目を5観点別尺度に分類し、それぞれの観点別尺度平均得点を求めた。尚、観点別評価得点算出に用いたデータは、柔道授業協力者によって柔道授業を経験した2年生のものとした。結果については、表9に示してある。

更に、それぞれの尺度間における関係性を明らかにする目的から、2変数間の相関係数（ピアソン）を求めることとした（表10参照）。その結果、それぞれの尺度間に統計的に有意な相関関係が認められた。

この結果から鑑みるに、今後の柔道授業をより安全で効果的に実践していくためには、「楽しく、創造的に理解を促す」、「安全でありながら柔道の機能的特性を十分に体験できる」、「分かる・できる体験の充実」、「創意工夫をとおした発見の連続」など、今にもまして複合的なねらいを捉えて教材研究をする必要性が問われることとなる。そうなれば、柔道授業協力者や柔道を特技としない保健体育教員の資質の向上は必至となろう。

ところで、本調査では、柔道授業協力者の積極的活用によって「柔道授業に対する好意的な態度」等の好転的な変容を期待できる可能性が示唆されたものの、「授業実施群である2年生の好意的な態度得点」は満足できるレベルとは言い難い。今後は、前述したように、柔道授業協力者の積極的な活用時における同一授業者の柔道授業に対する態度変容の調査・検討を進めることが第一義的な課題であり、第二報として調査結果を報告できるよう研究に邁進する所存である。

表9. 観点別尺度平均得点 (2年生)  
Table9. Average score of scale by viewpoint(8th grade)

	N	平均値	標準偏差
柔道授業に対する好意的態度得点	527	2.768	.860
柔道授業に対する効果的認知得点	523	3.032	.694
柔道授業のねらい (態度) 得点	519	3.416	.536
柔道授業のねらい (思考・判断) 得点	525	3.211	.689
柔道授業のねらい (知識) 得点	526	2.941	.729

表10. 観点別尺度間の相関関係 (ピアソンの相関係数)  
Table10. Correlation coefficient between scales by viewpoint (Pearsons')

観 点 別 尺 度		S1	S2	S3	S4	S5
S1: 柔道に対する 好意的態度得点	Pearson の相関係数	1	.582**	.495**	.466**	.495**
	有意確率(両側)		.000	.000	.000	.000
	N	527	522	518	523	524
S2: 柔道授業に対する 効果的認知得点	Pearson の相関係数	.582**	1	.680**	.601**	.595**
	有意確率(両側)	.000		.000	.000	.000
	N	522	523	516	520	521
S3: 柔道授業のねらい (態度) 得点	Pearson の相関係数	.495**	.680**	1	.788**	.650**
	有意確率(両側)	.000	.000		.000	.000
	N	518	516	519	516	517
S4: 柔道授業のねらい (思考・判断) 得点	Pearson の相関係数	.466**	.601**	.788**	1	.727**
	有意確率(両側)	.000	.000	.000		.000
	N	523	520	516	525	523
S5: 柔道授業のねらい (知識) 得点	Pearson の相関係数	.495**	.595**	.650**	.727**	1
	有意確率(両側)	.000	.000	.000	.000	
	N	524	521	517	523	526

\*\*、相関係数は1%水準で有意(両側)です。

#### IV. まとめ

本研究は、授業協力者導入による中学生の柔道授業に対する態度への影響を、アンケート調査の手法を用いて明らかにすることを目的とした。尚、授業協力者導入が、「柔道の授業への好意的態度の低さ」に対する好転的な態度変容の可能性や、学習指導要領に示されたねらい並びに各観点別評価に準拠した意識や態度の好意的な態度変容の可能性を達成し得ると仮定し、「柔道授業未実施群」と「柔道授業実施群」との間の各態度項目間の平均得点の差異をt-検定によって算出するとともに、各項目間の関連性を確認するために因子分析などの統計的手法を用いて研究を進めることとした。

得られた結果は、次の如くである。

- (1) 調査対象者の性別は、男子生徒635名、女子生徒460名（アンケート回答中学校・14校）となった。また、対象者の所属学年は、第1学年所属が566名（男子332名、女子234名）、第2学年所属が529名（男子303名、女子226名）であり、総計1095名であった。
- (2) 中学生の「保健体育授業に対する好意的な態度や効果感」は、「好意的な態度」に男子が優位であるという傾向が認められるものの、かなり良好であることが示唆された。
- (3) 本調査対象者の柔道授業に対する「好意的な態度」は中庸であり、「効果的認知」は、やや高いことが示唆された。
- (4) 「柔道授業に対する好意的な態度」は、授業協力者の積極的な導入によって、好転的な変容を来す可能性が示唆された。
- (5) 「武道」単元の中で、授業協力者の積極的な導入によって「日本の伝統的文化」に対する興味涵養が進む可能性が示唆された。
- (6) 観点別評価に準拠した「態度」に分類される7項目（「愛好的態度」、「公正的態度」、「協力的態度」、「責任遂行的態度」、「安全遵守的態度」、「伝統的形式を学ぼうとする態度」、「相手への尊厳的態度」）全てについて、1年生男女、2年生男女ともに良好であることが示唆された。その得点傾向を鑑みると、女子のほうが男子よりも優位に高いことも伺えた。
- (7) (6)の結果は、柔道授業協力者の積極的導入の好影響を示唆するものではなく、調査対象者の高い健全性や現在までの保健体育授業において涵養すべき「態度」に対する達成度の高さを担保するものである。
- (8) 本対象者は、男女ともに、保健体育授業をとおして、「思考力・判断力」の態度涵養がかなり進んでいることが示唆された。また、これらの項目の得点結果から、柔道授業に対する本授業対象者の高い動機水準が示唆された。
- (9) 「歴史や成り立ちを勉強したい」の項目では、1年生、2年生男女ともに中庸な値に留まり、柔道における、楽しく・効果的な「知識」享受を達成し得る教材の工夫開発が課題であることが示唆された。
- (10) 対象者の「柔道授業のみに対する態度尺度」16項目の評定値の項目相互の関連性を確認するために主因子法による因子分析を施し、抽出された因子を解釈・命名した結果、「柔道授業に対する観点別態度因子」と「柔道授業に対する愛好的・効果的態度因子」が得られた。これら2因子を「結果と考察2」で挙げた態度分類に準じて5観点別尺度とし、観点別尺度平均得点を算出した上で2変数間の相関係数（ピアソン）を求めたところ、有意な相関関係が認められた。このことから、より一層の複合的な教材研究を進め、柔道授業協力者や柔道を特技としない保健体育教員の資質向上の必要性が示唆された。

## V. 引用参考文献

- 1) 原岡一馬：態度変容の社会心理学,金子書房,1970
- 2) 木村昌彦他：授業協力者のための柔道授業ガイド,全日本柔道連盟,2016.3
- 3) 文部科学省：武道必修化に伴う柔道の安全管理の徹底について(依頼),2012.3.9  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1318538.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1318538.htm))
- 4) 文部科学省：柔道の授業の安全な実施に向けて,2012.3  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/judo/1318541.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/judo/1318541.htm))
- 5) 文部科学省：平成26年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果報告書,2014.11 ([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/sports/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/12/04/1353813\\_5.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/sports/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/12/04/1353813_5.pdf))
- 6) 文部科学省委託事業「武道等指導推進事業(武道等の指導成果の検証)」調査研究協力者会議：「武道等指導推進事業(武道等の指導成果の検証)」調査報告書,東京女子体育学,2015
- 7) NHK(2012)：「クローズアップ現代“必修化”は大丈夫か多発する柔道事故」(2012年2月6日放送)([www.nhk.or.jp/gendai/articles/3153/1.html](http://www.nhk.or.jp/gendai/articles/3153/1.html))
- 8) 高橋進他：柔道授業が高校生の意識に及ぼす影響について－学年差に着目して－,関東学園大学紀要,12:107-124,1987.2
- 9) 高橋進他：柔道に対する中学生の態度構造について,関東学園大学紀要,14:137-144,1988.12
- 10) 高橋進他：大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について－認知的側面と感情的側面の比較－,武道学研究,22(1):33-44,1989.7
- 11) 高橋進他：柔道に対する女子高校生の態度構造－男子高校生との比較－,関東学園大学紀要,16:109-115,1989.12
- 12) 高橋進他：柔道授業における高校生の態度変容について－学習ノートを使用した場合－,群馬栃木保健体育学研究(12):9-18,1993.3
- 13) 高橋進他：武道必修化における授業開始直前の中学生の柔道に対する態度ならびに価値意識について,講道館柔道科学研究会紀要,14:155-168,2013.3
- 14) 内田良：柔道事故－武道の必修化は何をもたらすか－(学校安全の死角(4)),愛知教育大研究報告59(教育科学編),131-141,2010.3